

農作物生産情報

(平成29年6月)

天候

(平成29年5月24日 仙台管区気象台発表 東北地方3か月予報より)

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

水稲

きめ細かな水管理で生育促進に努めよう！

1 水管理

- ・分げつ（茎数の増加）の適水温は、日最高水温30～32℃、日最低水温15～17℃、日較差15℃前後である。日平均水温が19℃以下になると分げつの発生が少なくなる。
- ・昼間止水・夜間かんがいを基本とし、暖かい日は浅水で水温を上昇させ、寒い日は葉先が冠水しない程度のやや深水で保温する。また、漏水防止に努め、掛け流しはしない。
- ・有効茎数（「青天の霹靂」は1株茎数18本程度、その他の品種は1株茎数20本程度）を確保した水田では、6月末頃から高温（平均気温が20℃以上）で晴天が続くようであれば中干しを行う。中干しは田面に軽く亀裂が入る程度とする。

○水管理の目安

生育期	暖かい日の水深	寒い日の水深
分げつ期	3 cm程度の浅水	5～6 cm程度の深水
有効茎数確保後	中干し	5～6 cm程度の深水

2 雑草防除

(1) 初期＋中期の体系処理の場合

初期剤使用後20日頃を目安に中期剤を散布する。

除草剤の散布後は、除草効果の維持と水質汚染防止のため、散布後7日間は止水し、落水や掛け流しをしない。

- (2) 一発剤を使用し、残草が見られた場合
残った草種に応じて除草剤を散布する。

【残った草種別に使用できる除草剤の例】

- ・ 広葉雑草（アゼナ・ホタルイ等）のみ → バサグラン剤
- ・ ノビエのみ → クリンチャー剤
又はヒエクリーン1キロ粒剤
又はワンステージ1キロ粒剤
- ・ 広葉雑草 + ノビエ → クリンチャーバスME液剤

※ 除草剤の使用基準を必ず守り、他の作物に飛散しないように注意して散布しましょう。

3 病害虫防除

(1) イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除し、発生が多い場合は6月上旬に水面施用剤を散布する。この時期の防除でイネドロオイムシも防除できる。

(2) 斑点米カメムシ類

カメムシの発生源となっている水田周辺の休耕田や、カメムシを誘引する畦畔の雑草（主にイネ科雑草）は、開花・結実する前に刈取りを行う。また、雑草の刈取りは水稻の出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。

(3) 葉いもち

- ・ 取り置き苗は、葉いもちの発生源となるので、補植が終わったら、直ちに処分する。
- ・ 葉いもちは、早い年には6月下旬に発生がみられるので、ほ場をこまめにチェックし、病斑が見られた場合には、航空防除まで待つのではなく、直ちに防除する。
- ・ 復元田や、いもち病に弱い品種を作付けした場合は、葉いもちの発生が見られなくても、水面施用剤による予防防除を必ず行う。
- ・ 水面施用剤（オリゼメート剤、オリブライト剤、ブイゲット粒剤）は、6月20日前後から6月末まで（中干し1週間前を目安）に湛水のまま施用する。施用後1週間は止水し、落水、掛け流しをしない。その間の入水は、水尻を止めたままで行う。

※ 「青天の霹靂」は、農薬の成分使用回数を地域慣行の1/2以内とすることが必須なので、農薬の使用に際しては成分数を確認する。

りんご

良果を見極め、早期適正着果で高品質果実生産を！

ふじの落花日は平年より3日早い5月16日（板柳町高増）であった。

本年は、不受精花（カラマツ）や発育のバラツキが見られるものの、結実はおおむね良好と思われる。摘果は果実形質を見極めながら進め、できるだけ早い適正着果で高品質果実の生産に努める。

1 摘果

摘果が遅れると、玉伸びや果実品質、次年産の花芽形成にも悪影響を及ぼすので早期適正着果に努める。

果実形質の良し悪しの判別が可能となった時点から、仕上げ摘果（下表参照）を行う。

○標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)	成らせ方の目安 直径2cmの成り枝 (ほぼ水平の枝)
紅 玉	3 頂芽に1果	33.3	15～16果
つがる、ジョナゴールド	3.5 //	28.6	12～13果
ふじ、王林、早生ふじ、さんさ、 未希ライフ、きおう、トキ、金星	4 //	25.0	11～12果
北斗、デリシャス系	4.5 //	22.2	10～11果
陸奥、世界一	5 //	20.0	8～9果

摘果剤を散布した場合、落果は散布10日後頃から始まり、以後10～14日間続く。散布時の天候等の条件によって効果が十分に現れない場合もあるため、仕上げ摘果は遅れないように注意する。

青森りんご生産力強化実践運動：

黒星病撲滅運動期間（4月～12月）

適正着果量確保推進運動期間（5月～11月）

2 つる割れ防止対策（早生ふじ、ふじ）

生育の早い年は、ふじ等につる割れが多発する傾向にある。

例年、発生が多い園地ではヒオモン水溶剤の利用を検討する。また、有袋にすることで発生を軽減できるので、積極的に取り組む。

○ヒオモン水溶剤の使い方

品種名	使用目的	使用時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10a 当たり散布量	備考
ふじ 早生ふじ	つる割れ軽減	満開20日～30日	1回	3回以内	3,000倍	300～600?	展着剤不要 有効成分：ナフタレン酢酸ナトリウム 4.4%

※使用上の注意

- ・本剤は単用散布とする。(展着剤は使用しない)
- ・散布後に葉がしおれる症状(エピナスティ)を示すが、1週間後にはほぼ回復する。
- ・高温、乾燥時の散布は避ける。新梢先端部の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例がある。
- ・極端に樹勢の弱い樹への散布は避ける。
- ・果実肥大が抑制される場合がある。
- ・新梢の二次伸長を助長する場合がある。
- ・摘果剤(マイクロデナポン水和剤85)を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

3 病害虫防除

「農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない！」

黒星病の胞子が飛散しているので、果実への感染防止のため6月中旬(落花30日後)頃まで10日間隔での薬剤散布を徹底する。散布に当たっては、散布ムラがないよう節約せず適量を散布する。また、散布予定日に降雨が予想される場合は事前散布に徹する。

(1) 防除体系(県りんご病害虫防除暦より抜粋)

回	散布時期	薬 剤 名	
5	落花20日後頃 ※前回との間隔(10日)	炭酸カルシウム水和剤 クワコナカイガラムシ防除剤 チウラム剤 又はジマンダイセン水和剤	100倍 500倍 600倍
6	6月中旬頃 (落花30日後頃) ※前回との間隔(10日)	炭酸カルシウム水和剤 アントラコール顆粒水和剤 又はチウラム剤 又は有機銅水和剤(80) 又はオキシラン水和剤	100倍 500倍 500倍 1200倍 500倍
7	7月初め ※前回との間隔(15日)	ピレスロイド剤 アントラコール顆粒水和剤 又はチウラム剤 又は有機銅水和剤(80) 又はオキシラン水和剤	500倍 500倍 1200倍 500倍

※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックフロアブル

※ピレスロイド剤：バイスロイドEW、サイハロン水和剤、テルスター水和剤、ロディー水和剤、イカズチWDG

※有機銅剤：キノンドー水和剤80、オキシンドー水和剤80

(2) 留意事項

- ・トップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍は摘果後の果柄感染の防止効果が高いので、腐らん病の発生が多い園地では6月中旬にいずれかを使用する。
- ・有袋栽培では、すす斑病・すす点病対策として袋掛け前の「実洗い」を徹底する。
- ・クワコナカイガラムシの発生の多い園地では、「落花20日後頃」にも防除剤による胴木洗いを手散布で行う。また、6月下旬（越冬世代成虫の産卵前）に1回目のバンド巻きを行い、7月中旬（第1世代卵のふ化前）に除去する。
- ・アブラムシ類の発生の多い園地では、発生に応じてネオニコチノイド剤、ウララDF、キラップフロアブルのいずれかを使用する。

4 追肥

追肥を計画している場合は6月末までに終わる。施肥量は結実量と樹勢に応じて1樹ごとに加減する。

5 苦土（マグネシウム）欠乏対策

苦土欠乏は、土壤の酸性化に伴うマグネシウムの溶脱などによるものであり、欠乏症がみられたら、下表に従い葉面散布用の精製硫酸マグネシウム（グリーントップまたはグリーントップ70）を1～2回散布する。2回散布する場合は、散布間隔を7～10日あける。

資 材 名	マグネシウム 含量(%)	水100ℓ当たり使用量	
		5月末まで	6月以降
グリーントップ	16	1,500g(67倍)	2,000g(50倍)
グリーントップ70	23	1,000g(100倍)	1,400g(71倍)

なお、苦土欠乏は土壤の酸性化が原因なので、予防のため、土壤診断を行い、自園の状況に応じて苦土肥料を施用する。

ぶどう

スチューベンの開花は平年より3日程度早い見込み。
摘梢はできるだけ早く行い、樹勢に応じた摘心を心がけよう！

スチューベンの展葉日は5月8日（鶴田町境）で、平年より1日早かった。

1 摘梢

- ・養分の競争を防ぐため、摘梢はできるだけ早めに行う。
- ・残す新梢の目標本数は、列間2.5mの場合、スチューベン、キャンベル・アーリーとも主枝1m当たり8～10本とする。

2 摘心（1回目）

1回目の摘心は開花7日前頃に行い、品種や樹勢に応じて強さを調整する。

品 種	摘心部	樹勢	副梢の取り扱い
スチューベン	第1花穂 上位5枚	強	①すべての副梢をかき取り、その後発生した先端の副梢を1本残す ②上位1本の副梢を残し、下位はかき取る ※①か②を選択する
		中	
		弱	上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
キャンベル・アーリー	第1花穂の 上位3～4枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
サニールージュ シャインマスカット	第1花穂の 上位5枚		上位1本の副梢を残し、下位はかき取る
ポートランド ナイアガラ	第1花穂の 上位4～5枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る

3 花穂の整形

- ・花穂整形時期は、開花5日前頃から1～2花咲き始める時が適期である。
- ・スチューベン、ポートランド、ナイアガラでは、花穂の岐肩（通称：カタ）のみを除去する。
- ・キャンベル・アーリーでは、花穂の岐肩、岐肩下の長い支梗や軸の間隔が広いものを除去し、さらに花穂の先端も軽く切り詰める。
- ・シャインマスカットは、岐肩と上部支梗を除去し、花穂の先端4cmを残す。

4 シャインマスカットの無核栽培

シャインマスカットの無核栽培では無種子化を確実にするため、ストレプトマイシン処理を行ってからジベレリン及びフルメット処理を行う。

(1) ストレプトマイシン処理

満開予定日14日前～開花始期にストレプトマイシン200ppm溶液を花房に散布または浸漬する。

(2) ジベレリン及びフルメット処理

・無核3回処理の場合（ジベレリンは2回処理）

1回目は無種子化のために、満開時～満開3日後にジベレリン25ppm溶液に5ppmのフルメット液剤を加用した溶液に花房浸漬する。処理適期は、花穂先端まで咲ききったときである。

2回目は果粒肥大促進のために、満開10～15日後にジベレリン25ppm溶液に果房浸漬する。

・無核2回処理の場合（ジベレリンは1回処理）

満開3～5日後（落花期）に、ジベレリン25ppm溶液に10ppmのフルメット液剤を加用した溶液に花房浸漬する。

5 病害虫防除

「農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない！」

（県ぶどう病害虫防除暦：スチューベン基準より抜粋）

時期と10アール 当たり散布量	基準薬剤名と倍数			
	殺菌剤		殺虫剤	
開花10日前 6月上旬 (250 $\frac{1}{2}$ リットル)	アリエッティC水和剤	800倍	ベストガード [®] 水溶剤	1000倍
	又はキノンド [®] 水和剤40	600倍	又はパタンSG水溶剤	1500倍
	又はインダ [®] フロアブル	8000倍	又はアグロスリン水和剤	2000倍
	又はワンリーワンフロアブル	2000倍	又はアディオンフロアブル	1500倍
開花直前 6月中旬 (250 $\frac{1}{2}$ リットル)	アリエッティC水和剤	800倍	ベストガード [®] 水溶剤	1000倍
	又はゲッター水和剤	1500倍	又はパタンSG水溶剤	1500倍
			又はジノフラン剤※	2000倍
落花直後 6月下旬 (250 $\frac{1}{2}$ リットル)	ロブラール水和剤	1500倍	アグロスリン水和剤	2000倍
	又はポリバリン水和剤	1000倍	又はアディオンフロアブル	1500倍
	又はスイッチ顆粒水和剤	2000倍	又はジノフラン剤※	2000倍
	又はフルビカフロアブル	2000倍		

※ジノフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

- ・例年灰色かび病の発生が多い園地では、開花直前にゲッター水和剤を選択する。
- ・べと病の発生が多い園地では、開花10日前にアリエッティC水和剤又はキノンド水和剤40、開花直前にアリエッティC水和剤を選択し、落花直後にランマンフロアブル又はライメイフロアブルも使用する。
- ・黒とう病の発生が多い園地では、開花直前にアリエッティC水和剤、落花直後にポリバリン水和剤を選択する。

おうとう

佐藤錦の収穫は平年より早まる見込み。
早めの摘果と適期防除で品質向上に努めよう！

佐藤錦の満開日は5月3日、落花日は5月13日（鶴田町菖蒲川）で、いずれも平年より3日早かった。

1 摘果

着果量が多すぎて品質の低下が懸念される場合には摘果を行う。摘果は生理的落果が終わり、実止まりが確認された後（佐藤錦・南陽で横径10mm以上、紅秀峰で横径8mm以上）にできるだけ早く行い、満開後30日頃までには終える。着果数は1花束状短果枝当たり2～3果に制限する。

2 裂果防止対策

ビニールによる被覆は、裂果の発生しやすい着色開始期（淡紅色に着色した果実が樹全体の2～3割程度となったころ）に行い、収穫終了後は速やかに取り除く。

3 着色管理

(1) 葉摘み

果実の着色がある程度進んだ頃（おおむね収穫予定の7～10日前頃）から行い、果実に直接かぶさっている葉を軽く摘み取る。過度の葉摘みは果実品質を低下させたり、翌年の花芽の充実不足、樹勢の低下を招くおそれがあるので、摘み取る量は最小限にとどめる。

(2) サンキャッチ液剤30Sの利用

着色促進のため、サンキャッチ液剤30Sを利用する場合は、以下により使用する。

- ・対象品種：佐藤錦、南陽
- ・処理方法：600倍液を立木全面散布
- ・処理時期：収穫開始14日前（着色が樹全体の2～3割頃）と7日前の2回
- ・散布量：300 $\frac{\text{L}}{\text{ha}}$ ／10a、単用で展着剤不要

4 収 穫

成熟したものから順次すぐりもぎを行う。

○各品種の収穫期

品 種	満開日から収穫日 までの日数	収 穫 期 (県南果研セ、平年)
紅 さ や か	40～45日	6月下旬
香 夏 錦	40～50日	6月下旬
佐 藤 錦	45～55日	6月下旬～7月上旬
北 光	50～60日	6月下旬～7月上旬
紅 秀 峰	60～70日	7月中旬
ナポレオン	60～70日	7月中旬
サミット	60～70日	7月中旬
南 陽	60～70日	7月中旬

5 病虫害防除

「農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない！」

(県おうとう病虫害防除暦：佐藤錦基準より抜粋)

時期と10アール当たり散布量	基準薬剤名と倍数	
満開35日後 6月上旬 (500㍓)	アミスター10フロアブル	1000倍
	又はナリアWDG	2000倍
	又はアンビルフロアブル	1000倍
	又はオンリーワンフロアブル	2000倍
収穫前 (500㍓)	アミスター10フロアブル	1000倍
	又はナリアWDG	2000倍
	又はインターフロアブル	5000倍

- ・満開35日後以降、灰星病の多発が懸念される場合は、佐藤錦の収穫7日前頃にルビゲン水和剤、インターフロアブル、パスワード顆粒水和剤のいずれかを特別散布する。
- ・「南陽」や「サミット」などの晩生種では、灰星病対策として収穫前にアミスター10フロアブル又はナリアWDGを特別散布する。
- ・ショウジョウバエ類の発生が懸念される場合は、満開35日後と収穫前にテルスターフロアブル又はスカウトフロアブルを特別散布する。

野菜

◆トマト◆

草勢にあわせたこまめな肥培管理に努めよう！

1 定植後の管理

- ・ 3段花房開花頃までは、できるだけかん水を控えて、根を深く張らせる。
- ・ ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。高温障害が発生しやすいため、天候によりサイド換気や肩換気を行う。
- ・ 気温が低下する日や夜間はサイドを閉め、保温に努める。夜間は14℃以上を目標とする。6月中旬以降、最低気温が14℃以上になれば、夜間でもサイドを解放する。

2 着果の促進

- ・ トマトトーン処理は、なるべく気温の低い午前中に行う。低温時（20℃以下）50倍、高温時（20℃以上）100倍の濃度で、1花房当たり1～1.5cc噴霧する。
- ・ 1～4段花房は4番花開花始め、5段花房以降は3～4番花開花始めに行い、散布回数は1花房1回とする。

3 かん水と追肥

- ・ 試しかん水は、2段花房のトマトトーン処理後に1株当たり1リットル程度を目安に行うが、草勢が強い場合はトミー液肥ジャンボ(500倍)を加用する。
- ・ 本格的なかん水と追肥は、3段花房のトマトトーン処理終了後から行うが、活着が遅れたほ場や草勢が衰えている場合はトマトトーン処理前に行う。
- ・ 1回当たりの追肥量は、3日に1回の場合は、窒素成分0.5kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物8.3kg/10a以内)、2日に1回の場合は、窒素成分0.3kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物5kg/10a以内)とする。

4 摘果

- ・ 3段花房トマトトーン処理後に、1段果房を一斉に摘果する。奇数段は3果、偶数段は4果になるよう摘果する。
- ・ ただし、草勢が極端に弱い場合は、2段花房トマトトーン処理後1～2果程度に着果を制限する。

5 病虫害防除

- ・ 灰色かび病が発生しやすくなるので、葉先枯れ(カリ欠乏症)の予防や花カスを取り除くとともに、ハウス内の換気と薬剤による予防防除に努める。
- ・ アザミウマ類の発生が多くなるので、開花前にほ場周辺のクローバー等を除草するとともに、薬剤による防除を行う。

◆メロン◆

計画的な整枝作業とこまめな温度管理に努めよう！

1 温度管理

- ・定植後は最高気温28～30℃、開花期は最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉などでこまめな温度・湿度管理を行う。特に夜間の締め切りは軟弱徒長となり、病害虫の発生の原因となるので、こまめな開閉を心がける。

2 かん水

- ・かん水は着果確認後（鶏卵大の頃）から着果2週間後頃までに行う。1回の量は、株当たり4リットルが目安となるが、土壌水分により加減する。
- ・開花期のかん水は、湿度の上昇により花粉が出にくくなるので控える。
- ・草勢（つる先の立ち上がり、葉色、孫づるの伸長）を見て、液肥や葉面散布を行う。

3 摘心と整枝

(1) 結果枝（孫づる）の摘心

- ・弱勢の場合：着果節位を1～2節上げる。孫づるの葉1枚を残し、摘心する。
- ・適勢の場合：開花前後に孫づるの葉1枚を残し摘心する。
- ・強勢の場合：開花予定日の3～4日前に孫づるの葉1枚を残し、摘心する。

(2) 結果枝以外の整枝

- ・22～23節で子づるを摘心する。15～20節の孫づるを除去する。
- ・整枝は着果後10日までに終了し、風通しを良くし、ネットの形成を促進する。

大豆

雑草防除と中耕・培土をしっかりと行おう！

1 は種

- ・は種量は「おおすず」で7 kg/10aを基準とする。
- ・は種直後の多雨は、出芽率、初期生育の不良を招くので、気象情報に注意しながら作業する。
- ・は種作業は6月10日頃までに終わるようにする。やむを得ず、は種が遅れる場合は畦幅や株間を詰めて、は種量を増やす。

2 雑草対策

(1) 土壌処理剤

- ・土壌処理剤は、ほ場表面の水分が低いと効果が劣るので、は種後速やかな散布が望ましい。
- ・出芽した雑草には効果がないので注意する。

(2) 茎葉処理剤

- ・イネ科雑草用の茎葉処理剤は、薬剤により効果が異なるので発生状況に合わせて選択し、効果的に使用する。
- ・広葉雑草に使用できる茎葉処理薬剤は大豆バサグラン液剤のみであり、散布回数も1回となっているので、発生状況に合わせて効果的に使用する。
- ・畦間処理、株間処理の除草剤が増えているので、土壌処理、茎葉処理で残草が多い場合は利用できる。ただし、大豆に薬剤が飛散しないよう、専用ノズル、カバー等を使用する。

(3) 中耕・培土

- 1回目：本葉2～3葉期 初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。
- 2回目：本葉5～6葉期 第1本葉のつけ根まで土寄せする。

小麦

小麦赤かび病の予防に努めよう！

1 病害虫防除

(1) うどんこ病、赤さび病

早期発見に努め、発生初期での防除に努める。薬剤は下葉にも十分付着するように散布する。

(2) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなる。

感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こすことがあるため、出荷できない。

防除は、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布を行う。

2 収穫作業

(1) ネバリゴシ

出穂後46～50日、出穂後積算温度830～950℃、子実水分25%を目安とする。

(2) キタカミコムギ

- ・ 出穂後50～55日、出穂後積算温度900～1,000℃、子実水分25%を目安とする。
- ・ 穂発芽しやすいので、天候しだいでは水分30%での刈り取りが必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

花 き

適正な温度管理により高品質な花きの生産に努めよう！
土壌診断に基づいた施肥設計で、バランスの良い土づくりに努めよう！

◆キ ク◆

1 定植前後の管理

- ・10月出荷の作型では、6月中～下旬が挿し芽の時期となる。
- ・長さ・太さが揃った挿し穂を用い、定植2週間前から挿し芽を行う。
- ・挿し芽後は、最高温度25℃を目安に管理し、定植1週間前からは温度を下げて、順化させる。
- ・定植床へのかん水は定植の数日前に十分に行い、定植後も軽くかん水する。
- ・定植後は、日中25℃以下を目安にハウス内温度を管理する。

2 病虫害防除

白さび病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類の早期発見・早期防除に努める。

◆トルコギキョウ◆

1 定植作業

- ・10月出荷作型での定植は、6月上～中旬が適期である。
- ・老化苗は生育が劣るので、本葉が4枚展開までのものを使用する。
- ・高温が続く場合には、定植1週間前から遮光率40%程度の遮光資材で被覆し地温を下げておく。軟弱徒長を防ぐため、活着を確認したら被覆資材は除去する。なお、除去は曇天または夕方に実施し、葉焼けを防ぐ。
- ・植え付けは深植えとせず、また、株元を強く押さえないようにする。

2 定植後の管理

- ・発蕾までは乾燥させないように管理する。
- ・気温25℃以上が続くと生育の停滞やロゼットの要因となるので、換気等温度管理を徹底する。
- ・分枝が低節位から発生した場合は、草丈が25cm前後の時期に地際から20cm程度までの側枝を摘み取り、主枝の伸長を促す。

3 病虫害防除

灰色かび病、アブラムシ類、アザミウマ類の早期発見・早期防除に努める。

◆土づくり◆

施設栽培のは場では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、土壌診断に基づく適正な施肥を行う。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

- 安心な農産物生産のため、農薬使用状況を必ず記帳しましょう。
- 農薬使用の際には、必ず使用者の責任で最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 短期暴露評価の導入により使用方法が変更されている農薬もあるので、変更後の使用方法に基づいて使用しましょう。
- 鍵のかかる農薬専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です！
- まわりが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です！
- 節電を意識するあまり、熱中症予防を忘れないようにご注意ください！